

平成17年10月28日(金)

紙おむつの利用が赤ちゃんだけでなく、高齢化社会を反映して、お年寄りの間でも増えている。そこで、問題となるのが、原料の木材資源への影響や、使用後に焼却するによる大気汚染「それなら」と、使用済み紙おむつの再利用に取り組む国内初の工場がこの春から、福岡県大牟田市健老町で稼働している。

■□工場の名称は「ラブ・フォレスト大牟田」。ラブ・フォレストは英語で「森を愛する」という意味だ。運営しているのは、福岡市の「トータルケア・システム」長武志社長(60)で、紙おむつの主な素材は、パルプと、排せつ物の水分を吸い取る高分子吸収剤、それに全体を包むビニール。

長さんは紙おむつの利用が白な上質のパルプと、低質のパルプを取り出す。上質のパルプは現在、壁などの建築資材や紙容器に利用している。しかし、処理量が増え、メーカーに安定して供給できるようになれば、工場では、紙おむつとして再利用の計画だ。低質のパルプの方は、土壤改良剤などに役立っている。1日の処理能力は約10万枚(20トン)。当初は約4トンの処理だったが、現在は同県や佐賀県の介護施設など計約120か所から12トンが持ち込まれ、1トンあたり5万円でパルプを取り出している。

紙おむつを焼却しないで済む方法はないだろうか。知人に紹介された福岡大と共同で開発した。紙おむつの主な素材は、パルプと、排せつ物の水分を吸い取る高分子吸収剤、それに全体を包むビニール。

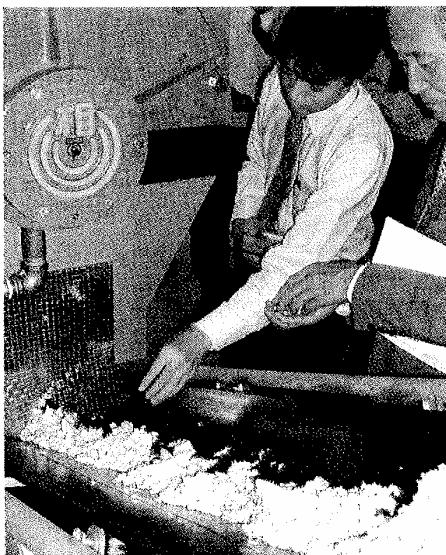
紙おむつ

リサイクル



▶紙容器・土壤改良剤…

国内初の工場 大牟田で操業



使用済みの紙おむつからできた真っ白な上質パルプ(福岡県大牟田市)の工場で)

き混ぜると、しばらくしてパルプと吸収剤などに分離できることが分かった。紙おむつに含まれるパルプの回収率を引き上げるために、塩化カルシウムをどの程度混ぜるかの実験を繰り返し、60%まで高められるようになった。パルプを取り出す工程ではもちろん、何度も洗浄する。

2000年には、福岡県がこの技術を「産学官共同研究開発事業」に採択。県の助成で、「リサイクルおむつ」の需要調査などを実行したうえで、事業化に着手した。

賀眞の介護施設など計約120か所から12トンが持ち込まれ、1トンあたり5万円でパルプを取り出している。

高齢化で使用増 環境保護に注目



長さんは「技術を広く伝え、世界の環境保護につなげたい」と張り切っている。山田真也

日本衛生材料工業連合会(東京)によると、04年の紙おむつの使用量は乳幼児用が約65億6900万枚(25万2000枚)、大人用が約34億枚

(約16万6000枚)。大人用は1995年に比べて約20億枚も増えている。

このため、紙おむつメー

カー最大手のユニ・チャ

ムは「紙おむつのゴミが將

来、大きな社会問題となる

可能性がある。再利用への取り組みは重要」として、

トータルケア・システム社に出資しているほど。

環境保護団体も取り組みを評価し、再生パルプを使

った土壤改良剤で綿花を栽培したり、再利用の紙おむ

つのファッショニング・計画

計画したりしている。

長さんは「技術を広く伝

え、世界の環境保護につな

げたい」と張り切っている。